

(別紙様式3)

平成31年 3月 29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都渋谷区渋谷1-21-18

管理機関名 学校法人 渋谷教育学園

代表者名 理事長 田村 哲夫

印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月 2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 渋谷教育学園渋谷高等学校

学校長名 田村 哲夫

3 研究開発名

探究型学習を、いかにして「行動できるリーダーの育成」につなげるか

4 研究開発概要

複数教科・科目から学ぶアプローチと問題発見・解決型の活動を重視し、それにより知識の充実、発信意欲・技術の向上、交渉・連携しつつ行動する力の強化を図る。テーマを「人間の安全保障」とする。

今年度は、従来の教科横断による取り組みに加え、世界高校生水会議の開催にむけての準備、運営を行った。生徒ボランティアの募集や、教員の仕事分担、保護者への定期的な情報の発信に組み、学校全体として、会議を成功に導いた。

行動できるリーダーの実践として、多くの生徒が会議やその他の取り組みに積極的に参加した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (契約日～31年3月29日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
The World in 2050	←			→								
Project HIROSHIMA	←											→
Wars and Conflicts	↔									←	→	→
Social Justice	←											→
修学旅行プロジェクト							↔	→				
Write for the Future	←			→								
国際高校生水会議	←										→	
大学による評価会					↔					↔		
運営指導委員会					↔						↔	
報告書作成										←	→	→
ホームページ作成	←											→
SGH 成果発表会		←		→								

(2) 実績の説明

本学は、「自調自考」－自ら調べ、自ら考える－という教育の基本目標のもと、「国際人として資質を養う」ことを教育目標の一つに掲げ、中高一貫校の特徴をいかし、国際理解教育やコミュニケーション力の育成を継続して行うことで、広い視野を持ち、国際社会で活躍できる人材を育む教育を目指している。渋谷教育学園渋谷高等学校、同幕張高等学校の両校ともに学内の校務分掌に国際部を設置し、定期的に会議を開催している。また目標達成にむけて積極的に行動できるよう、学内研修会を行い共通理解がすすむよう支援している。さらに長期的な視野のもと、学園の取り組むべき戦略を管理職と共有すべく、両校の副校長も交えた戦略委員会をたちあげ、連携した実践にむけた取り組みを支援している。今年度は、特に以下の実施について、取り組みを行った。

・学园内情報共有支援

SGH 最終年度となる今年度は、その集大成として、7月に世界高校生水会議 (Water is Life 2018 以下 WIL) を実施した。その準備として、従来の SGH 委員会に加え、WIL 委員会を設置し、学園での共通理解が図れるよう定期的に委員会を開催した。また、外部にむけた研修報告会の開催、生徒の成果報告の機会や学校訪問の受け入れなど、SGH 普及活動に努めた。

(2018 年度開催回数 戦略委員会 (含む SGH) 24 回 国際部会 15 回 WIL 委員会 8 回)

・カリキュラム実践への支援

引き続き外部との連携を図り、課題研究に沿った講演会やワークショップを開催するとともに、連携大学からの留学生 (院生) をメンター (TA) として受け入れ、授業への参加を依頼した。また担当教員の授業時間数を削減し、ユネスコスクールとしての活動と SGH の活動の連携を図った。

(2018 年度 TA 受け入れ人数 88 名 外部講師依頼 4 名)

・運営指導委員会開催支援

SGH 運営指導委員会にて取り組みの評価・検証を中立的に行った。SGH 運営指導委員には、定期報告並びに評価検証を行うとともに、プログラムの進捗状況、経理を含めたプロジェクトの管理状況について都度確認・報告を行った。運営指導委員からは、本取り組みについて生徒へ適切な助言、及び全体の取り組みへの適切な助言をいただいた。

(開催回数 3回)

・情報公開に関する支援

定期的に学校の広報紙を通じて保護者や学校関係者へ周知し、カリキュラムの内容や実施成果についての広報に努めた。また多くのSGH校、関係委員会等の訪問を受け入れ、成果の普及に努めた。WILの開催にあわせて、SGH研究報告会を開催し、会議の公開と取り組みの発表を行った。通年で本学園の取り組みの公開に努めた。

(受入れ総数 16回 学校 11校・海外 2団体・教育委員会 2回・官庁 1回)

(学校広報誌掲載 6回 SGH 研究報告会 1回・12校より生徒教職員来校)

・中間評価後の取り組みに対する支援

3年目の中間評価では、「優れた取り組み状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」との最高評価を得た。また、学校への個別評価コメントは、次の通りである。

○課題研究における研究内容と英語コミュニケーション能力向上のための指導のバランスが取れており、更なる発展が期待される。

○平和や戦争、安全保障など将来の日本人には避けて通れないテーマに正対し、それに様々な工夫をしながら段階を追って生徒に考えさせている点が高く評価できる。

○社会貢献活動に取り組んだ生徒の割合、グローバルリーダーとして国際社会で活躍したいと答える生徒の割合が大きく向上している点も高く評価できる。

これをうけて、①卒業生に対する調査手法の確立、②行動できるリーダー像の明確化、③評価方法の工夫に取り組んだ。具体的には、同窓会組織のネットワーク化の構築、公欠の規定の明確化、評価基準の共有化を進めた。

・世界高校生水会議 (Water is Life 2018) 開催支援

今年度最大のプロジェクトであった世界高校生水会議 (WIL2018) の成功にむけて、連携大学以外に、様々な外部機関との連携を図った。具体的には、会議前に提出された各チームの論文審査を行う審査員の依頼、講演者の依頼、トヨタ自動車をはじめ、様々な企業によるワークショップの準備、見学先施設の選定・準備など多岐にわたる調整、準備を実施した。会議には、世界18か国140名の高校生を含め250名を招き、参加者数300名あまりが参加した。5日間にわたる会議では、5つの部門に分かれた討議やポスターセッション、関連施設の視察や講演、ワークショップ、日本文化体験など密度の濃い会議となった。事後アンケートの結果からも、参加者の満足度が高く、成功裏に終えることができた。また、渋谷中高、幕張中高から500名近い在校生がボランティアで運営に関わり、英語で行われる国際会議の経験を積むことができた。

(開催時期 2018年7月24日～28日)

(参加者 世界18か国 高校生137名 教員54名)

(支援企業・団体数 17)

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (契約日～31年3月29日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
The World in 2050	←			→								
Project HIROSHIMA	←										→	
Wars and Conflicts	↔									←	→	
Social Justice	←											→
修学旅行プロジェクト							↔					
Write for the Future	←			→								
国際高校生水会議	←									→		
大学による評価会					↔					↔		
運営指導委員会					↔						↔	
報告書作成										←	→	
ホームページ作成	←											→
SGH 成果発表会		←		→								

(2) 実績の説明

グローバル・イシューとして「人間の安全保障」を設定し、それに関わる課題（平和・人権）に取り組む。その探究活動を通じて、課題解決に向けての方策を考え実践できる力を身に付けるために、次のようなプロジェクトを実施した。

① The World in 2050 (高校1年生対象・1学期 207名)

- i) 中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ、それらを活用するために『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を導入として用いた。

『2050年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序と、21世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、テロとの戦いなどの不安定要因、トランプ政権の外交戦略（シリアへの空爆やロシア疑惑など）を取り上げた。Gゼロ時代の国際秩序が混沌とする世界情勢に関心が集まった。

また、「女性の機会」「AIとの未来」「少子化と高齢化」といった課題を取り上げ、ロールプレイなどを取り入れて様々な視点から議論を重ね深め、小論文にまとめた。今年も、連携大学から海外の女性研究者を招き、その方を特別講師として授業を行った。(公民科)

- ii) 公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事(英文)を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに内容に関する更なる調査を行い、それをもとにプレゼンテーションやディベート、エッセイ(英語)として完成させた。(英語科)

② Project Hiroshima (高校1年生対象・年間 207名)

広島への研修とその前後の期間に、戦争・紛争や平和についての価値観の文化間比較を通して「人間の安全保障」について多角的に理解を深めると共に、英語を用いて「広島」を発信する方法を実践的に学び海外校での発表の機会を設けた。

- i) 図書館の資料やインターネットを利用して広島について調べ、その情報を精査し発信力を高める授業を行った。(情報科・1学期)
- ii) 戦争に対する理解、国際法上禁止される兵器、戦後の核開発と軍縮、現在の状況を整理した。前年までの反省を取り入れ、視点が偏らないよう留意し、多面的に学べるよう、特に以下の点について配慮した。
 - I、全員が意見を言える授業にする
 - II、熱い議論ができるよう、多様な意見を持つ生徒がグループをつくる
 - III、メッセージボードを活用し、1対1の議論をする (公民科・2学期)
- iii) 連携校である St. Stephen's Episcopal School (以下 SSES) と連携し、現地での研修で学んだことをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し SSES の生徒たちの意見や評価を得た。また、ヒロシマが教育の場でどのようにとらえられているかを国ごとに調べ、それぞれの違いについてデータや資料をもとに意見を英語でまとめた。(英語科・2学期)
高い評価を得たチームは実際に SSES を訪問し、直接プレゼンテーションを行い交流した。また帰国後、校内でフィードバックの機会を設けた。(英語科・3学期)
- iv) 核兵器に関する文学作品「黒い雨」とハリウッド映画を取り上げ、現代日本における核兵器への意識を考察しその表現方法の違いについて学んだ。(国語科・2学期)

③ フロリダ研修 (高校1年生対象)

英語科で行った Hiroshima Brochure Project に取り組み、広島を海外に発信するパンフレット(英語)を作成した。全37班の中から、パンフレットの完成度・英語での発表・東京外国語大学留学生とのやり取りを総合的に高い評価を得た班の中から、米国フロリダ州にある連携校の Saint Stephen's Episcopal School (以下 SSES) が上位2班を選び、SSES にて研修を行った。SEES では、世界史の授業でのプレゼンテーションと質疑、全校集会でのスピーチ、小学校での日本文化紹介、貧困家庭の子供たちが多く通うチャータースクールの見学など幅広い研修、ワークショップとなった。参加生徒は、通訳なしのすべて英語での発表だったが、しっかりとした事前研修の成果を十分に発揮した。

(参加生徒9名 引率1名 期間 2019年1月31日～2月5日)

④ Wars and Conflicts (高校1年生対象・1・3学期 207名)

- i) 高校1年間を通じて行ってきた平和学習のまとめとして、現代社会が抱える諸問題から生じる Wars and Conflicts を以下の6つのアプローチにより解決策を探り、発表し、国際社会での問題や国連の役割について学び、国際情勢に関する理解と知識を深めた。また、(社)経済広報センターの招きで来日した北米の社会科教員10名が来校し、授業へ参加した。日頃の学びの成果を英語で発表し、コメントをいただくことができた。
(公民科・1学期)

- ii) 少人数のグループを構成し、6分間のプレゼンテーション（1人1分以上話す）と大学院生のメンターによるQAセッションを実施した。また、必ずフィードバックセッションを行い、振り返りも行った。
- A：国語的アプローチ（新聞・雑誌・文学作品）
→「戦争文学」「フェイクニュース」
 - B：美術・音楽的アプローチ（映像・絵画・歌）
→「戦争における歌の役割」「啓蒙キャンペーン動画」
 - C：数学・理学的アプローチ（科学技術・統計・確率）
→「戦争におけるドローンの使用の是非」
 - D：家庭科・保健体育的アプローチ（保健・衛生・健康・食）
→「難民キャンプの食住環境の改善」
 - E：歴史的アプローチ（歴史的変遷、過去と現在の比較）
→「IS台頭の歴史的背景」
 - F：社会科学的アプローチ（経済・教育・法・国際機関・政策）
→「国連は本当に必要か」「多文化理解教育」（英語科・3学期）

⑤ Social Justice and Service learning（高校2年生対象・年間 233名）

- i) 現代世界における政治問題の背後には、経済的・文化的摩擦があり、それは歴史で読み取れるという考えに基づいて、通史の中で読み取っていくという授業を試みた。特にSGHのテーマであるSocial Justiceの中で、関係性が深いものについては積極的に取り上げた。
- ・貧困・社会的階層の分化を含む経済的摩擦について
 - ・宗教・民族を含む文化的摩擦について（地歴公民科 世界史）
- ii) 世界各地の環境問題、民族問題、人口問題、貧困などの諸課題には、その地域の自然環境、産業、文化が複雑に関係している。高校2年次の地理では、以前より能動的に社会に関わる力の育成を念頭に置き、世界の自然環境（気候・地形）、産業（農牧業・鉱工業）、生活文化（都市・人口・民族など）を中心に学習活動を行ってきたが、その学習活動の中で、本校SGHのテーマ「Social Justice」をふまえて、系統地理的に授業を展開した。
- ・アラブ海周辺地域における環境問題について（地歴公民科 地理）
- iii) 生物基礎の教育課程に沿って「種・遺伝子・生態系」3側面から生物多様性について深く学んだ。
- ・DNAの構造と機能について
 - ・野生生物の保護政策について
 - ・種の大量絶滅と大規模な気候変動の関わりについて（理科 生物）
- iv) 「共に生き、共に支える社会の実現」について、保育領域の「子どもの権利と福祉」を通して子供たちが受けている人権侵害の実情を通じて考える授業を行った。
- ・『児童の権利に関する条約』について
 - ・「世界の子ども達の現状」（ユニセフ発行）について（家庭科）

v) 国際社会における様々な問題（人権・エネルギー・環境など）について教科で専門的に学んだ経験をいかし、それを英語の授業で統合し発信した。今年度は、①人権、②水資源、③エネルギー政策、④幸福感、⑤イスラム、⑥生物多様性、⑦フェイクニュースを取り上げた。（英語科 年間）

vi) これまでの授業で諸問題に関係した社会貢献活動をそれぞれが計画し実行するプロジェクトを行った。実行したプロジェクトは学内で報告し、検証する機会を設けた。
（総合的な学習の時間・年間）

⑥ 修学旅行プロジェクト（高校2年生希望者対象 2学期 177名）

中国への修学旅行において、現地の高校生との交流事業を実施した。1対1での交流を実施することで、英語でのコミュニケーションの機会を設けた。また、互いの文化を紹介する時間を生徒主体で行い、それぞれの文化的背景についての理解を深めた。

（交流校 北京第一中学 及び 北京市広渠門中学）

⑦ Write for the Future（高校3年生全員対象 1学期 200名）

これまでに学んだグローバル・イシューや地球社会への貢献に関する知識や経験をもとに、テーマを設定し論文を作成し、発表した。

⑧ 連携大学による協力

英語授業での生徒の討議や作成物への支援として、連携大学より TA として留学生を招き、継続的にグループ討議に参加する機会を設けた。また評価にも加わり、教員の授業の進め方等多方面にわたり指導・助言を得た。

また、WIL での発表者への事前指導、会議での審査員等、様々な形でご協力いただいた。

⑨ Water is Life 2018

2年に一度開催される世界各国の高校生による、水に関する国際会議を開催した。

参加する高校生は、自国の水問題に結び付け、科学的・政治学的・経済学的、または学術的視点から水に関する研究活動をチームで行い、論文を作成する。論文は、会議前に提出され、実際の会議では、その研究成果を持ち寄り、互いに発表することで、他国の生徒たちと共有する。研究テーマは、科学技術・生物多様性・教育・地域・管理行政（政策）の5つの中から、チームごとに選ぶ。2014年に第1回が Raffles Institution（シンガポール）の主催で開催されて以降、2年ごとに行われている。第2回は、2016年に Maurick College（オランダ）で、今年 2018 年は、渋谷教育学園で開催された。

本校からは、2チーム6名が選ばれ、それぞれ教員指導のもと、研究活動を行った。1チームは、学校教育の機会を利用した東京湾の海洋汚染を削減する取り組みを行い、実際に小学校現場で、教育活動を行った。本会議において、教育部門での最優秀賞を受賞した。もう1チームは、災害時に利用できる雨水から飲料水をつくる技術をテーマとして実験を繰り返し行い、身近なものを利用した浄水装置の開発に取り組んだが、会議後も研究を重ねている。

また、本校からも200名近いボランティア生徒が会議の運営やホストをボランティアで引き受け、会議の成功に貢献した。参加した生徒の事後アンケートからは、実際の国際会議に関わった興奮や国際社会で活躍する夢に近づいた実感、運営の楽しさ、また SGH 校

であるのことの誇りを持ったなど、前向きな表現が多く寄せられた。英語力の別なく、自分の得意分野での貢献に自信につながった。

参加したチームの概要は、以下の表の通り。

SCHOOL	COUNTRY	THEME	TITLE
Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium	Austria	Eng&Tec	Methods of the Analysis of Microplastics in Water
Beijing National Day School	China	Bio	Research on Major Causes of Eutrophication in Poyang Lake
Collegio Claustro Moderno	Colombia	Eng&Tec	Bioremediation Efficiency of Contaminated Water Using Lemma minor
Vordingborg Gymnasium & HF	Denmark	Bio	Wetlands: A Multifunctional Solution
Tokyo Gakugei University International Secondary School	Japan	Eng&Tec	The Quality of Japanese Water
River Valley High School	Singapore	Eng&Tec	What is a Water Efficient Canteen?
Mahidol Wittayanusorn School	Thailand	Bio	The Efficiency of Mushroom and Fungi Isolated from Soil and Effluent for Decolorizing Red Reactive Dye
Makuhari Senior High School	Japan	Commu	Water Efficiency in Japan
Shibuya Senior High School	Japan	Edu	Recovering Water Quality in Tokyo Bay
d'Oultremontcollege	Netherlands	Commu	Water Problems in Fortified Cities
Kopernik Lyceum	Poland	Eng&Tec	IV Liceum Ogólnokształcące im. Mikolaja Kopernika w Rybniku Poland
Collegi Mare de Deu del Carmen	Spain	Stew&P	Public or Private Management of Water?
Mahidol Wittayanusorn School	Thailand	Eng&Tec	Development of Paper-Based Sensor with Portable Device for Real Time Fieldwork Detection of Arsenic in Water Resources by Electrochemical Method
Saint Stephen's Episcopal School	USA	Commu	Effects of Bicarbonate Addition on Montipora Growth Rate and Calcification
Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium	Austria	Eng&Tec	Bioanalytical Tools in Advanced Water Treatment

Collegio Claustro Moderno	Colombia	Eng&Tec	Bioremediation Efficiency of Contaminated Water Using Microalgae
Center for Young Scientists (CYS)	Indonesia	Eng&Tec	Domestic Waste Management System Community Based Sanitation (SANIMAS) in Kampung Kodok Br. Tunggal Sari Desa Dauh Peken Tabanan
Shibuya Senior High School	Japan	Eng&Tec	Use of Filters and UV Rays for a Dual-Filtering System During Disasters
St. Odulphus Lyceum	Netherlands	Eng&Tec	Rainproof
Raffles Institution	Singapore	Eng&Tec	Zinc Content in Metal Alloys and Its Relationship to the Antimicrobial Efficacy in Decontaminating Polluted Water
St Andrews College & Dlocesan School for Girls	South Africa	Eng&Tec	The Effect of Natural, Bio-Absorbent Substances on Heavy Metal Removal
John Monash Science School	Australia	Commu	Improving Melbourne's Urban Water Catchments
Oak Bay High School	Canada	Edu	Identifying Recyclable and Non-Recyclable Plastic Polymers on Southern Vancouver Island Beaches
Beijing National Day School	China	Edu	Research on the relationship Between Economic Growth and the Awareness on Water Protection—A Case study of China and Japan
Eisbjerghus Internationale Efterskole	Denmark	Commu	Local
Vordingborg Gymnasium & HF	Denmark	Eng&Tec	Biomagnification of Microplastic in the Food Chain
Dillmann-Gymnasium	Germany	Edu	Tap Versus Bottled Water: Water Preferences in Germany
International Christian University High School	Japan	Edu	Japanese's Extravagant Consumption of Water and How Education Can Ameliorate the Situation
Kumon Kokusai Senior High School	Japan	Commu	Issues of Water Conservation in Japan
Makuhari Senior High School	Japan	Eng&Tec, Commu, Bio	For Sustainable Inba
Narita Kokusai High School	Japan	Edu	The Waste of Water in Japan
Narita Kokusai High School	Japan	Commu	Sessui or Saving Water ~To Live with Water ~

Sakura High School	Japan	Stew&P	Preserving the Native Eco-System of the Inba Swamp
d'Oultremontcollege	Netherlands	Edu	The Rainwater Problem in the Netherlands
Maurick College	Netherlands	Bio, Edu, Stew&P	The influence of the Tide on the Drowned Land of Saeftinghe
Raffles Institution	Singapore	Commu	A Case-Study Investigation into the Effectiveness of Waterbody Management: Lorong Halus Wetland
River Valley High School	Singapore	Commu	Research on Active, Beautiful and Clean (ABC) Waters
Collegi Mare de Deu del Carmen	Spain	Bio	Drinking in Life: The Importance of Water
Detroit Country Day School	USA	Stew&P	The Great Lakes Water Quality Agreement: Challenges and Solutions
Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais	Brazil	Bio	Impact of Acid Irrigatio on the Development of Plants for Human Consumption
Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais	Brazil	Commu	Sustainable practives: Aleternatives for a Complex Problem
Lycee Saint Joseph	France	Bio	The Impact of Human Activity on the Rivers Water Quality of Our Town, Vervins (Picardie, France)
Maurick College	Netherlands	Eng&Tec	Waterfactory

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 生徒には、①授業アンケート②SGH アンケートの2種類を実施し、その成果を分析した。

結果、多くの生徒が授業の成果としてスピーキング力とプレゼンテーション力が身につけていると感じている。GTECの結果でも4技能すべてで年間の伸びが著しい。また、留学生による授業支援は評価している生徒が多く、継続的な支援をすることで活発な討議につながり、発信力の育成につながることが確認された。本校SGHの特徴である教科横断の取り組みにより、生徒たちの課題へのアプローチ方法が広がり表現の幅が広がったことで、英語で長文を書く、新聞を見ることへの抵抗感が低い。また高校1年生の時期から、将来への目的意識を持つ生徒の割合（将来自分の得意な分野で活躍したい）が徐々に増えており、継続的な取り組みの効果が次第に下級生へ伝わっていることが確認された。

最終年度を迎え、教科の連携がスムーズになり、カリキュラムとして落ちついたことで、生徒が先を見通して学習に取り組むことができ、更に授業への意欲・理解が深まったことが読み取れる。これまで学んだ知識やデータの活用力が大切だと考える生徒が増え、学びの広がりや深まりを感じ楽しむ様子があった。

SGH3 期となる 18 期生は、高校入学時に全学年が SGH となった最初の学年である。このため、SGH の流れを理解していたこともあり、高校 3 年終了時には、多くの項目で、これまでの学年を上回るアンケート結果を残した。「インターネットの英語サイトを利用できる」と答えた生徒の割合が 80% になるなど、新しいツールや技術を積極的に活用していることが読み取れる。また、より専門的な内容を英語でも取り入れることに自信をもつ生徒が増えている。特に、当初不得意な生徒が多かった「科学技術、研究開発に関する英語を読む、聞く」、「政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読む、聞く」といった項目でできると答えた生徒の割合に大きな上昇がみられた。教科横断の授業が機能し、他教科での専門的な学びと英語の教材が生徒の中で結びついていることが読みとれる。（図 1）

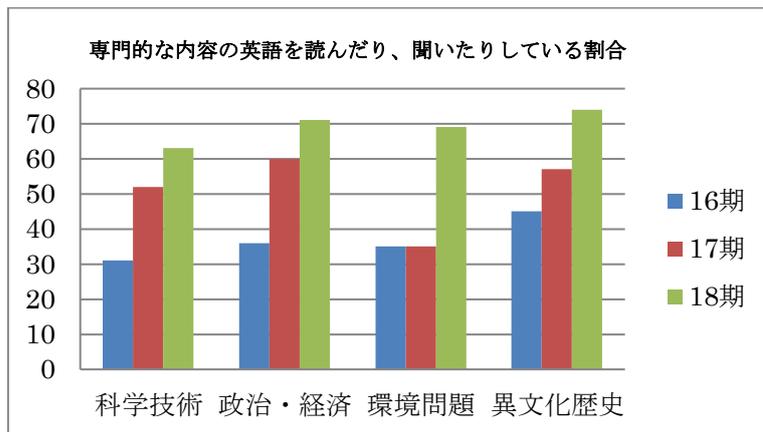


図 1

また、これと呼応するように、「自分の得意な分野でリーダーとして活躍したい」、「日本が存在価値のある国になるように自分ができることをしたい」、「国際会議で発言したい」など、貢献意欲が高まっていることが読み取れる。（図 2）

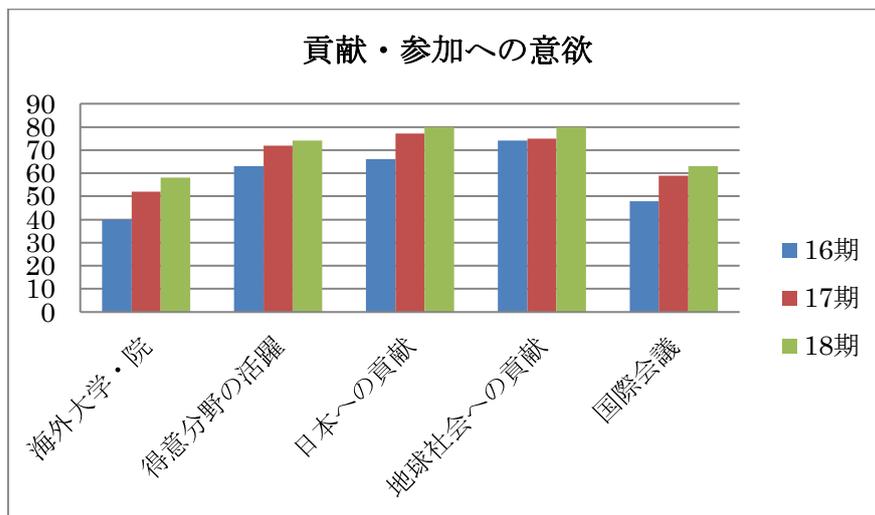


図 2

このことは、本校 SGH が目指してきた「行動できるリーダーの育成」という狙いが生徒に確実に伝わっているといえる。

前述した世界高校生水会議に多くの生徒が率先して関わったことから、行動できるリーダーの育成という狙いが十分に達成されている。また、学校外活動への参加意欲も高く、また表彰される生徒数も多くなった。

(2) 2018年度 SGH 活動成果一覧及び評価

Social Justice and Service learning の事例

1年間に取り組んだ活動総数 97件

- 主なもの
- 子供の人権にかかわる活動 25件
(子ども食堂支援・放課後学習支援・保育園手伝い)
 - 福祉・医療にかかわる活動 14件
(病院ボランティア・療育サポート)
 - 環境保護にかかわる活動 19件
(城跡下草かり・富士山美化活動)
 - 震災復興にかかわる活動 3件
(石巻復興支援・被災動物支援)
 - 海外にかかわる活動 14件
(WIL ボランティア・外国人観光客支援・通訳)

Write for the Future の事例

平和・紛争に関するもの

「現代社会における平和学習として適切な授業はどのようなものか」

「レバノンの難民問題を解消するには」

社会課題に関するもの

「高校生にもできるホームレス支援とは」

「移動式託児所～子連れでも楽しめる渋谷にするには～」

「日本の児童虐待を減らすためには」

(3) SGH その他の活動一覧

- ・第3回 SGH 全国フォーラムへの参加(代表生徒2名 高校1年生)

- ・国際水学会(International Water Association)の世界大会

Water is Life 2018 における渋谷教育学園の研究成果が審査員から高い評価を受け、東京ビッグサイトで開催された上記大会に招待された。研究をした生徒たちは WIL2018 の概要と自分たちの研究成果について世界各国から集まった専門家や企業の方々の前で発表した。

- ・SGH 研究報告会

7月26日、渋谷幕張中高にて、世界高校生水会議 WIL2018 と並行し、渋谷と渋谷合同でSGH研究報告会を開催した。渋谷は高校二年生を代表して、広島女学院のSGH研究発表会で発表したチーム、フロリダ研修に参加したチーム、授業で印象的なプレゼンをおこなったチームが日本語と英語で報告し、文部科学省、SGH校の教職員や生徒の皆さんから高い評価を受けた。

- ・世界こどもの日ユース・フェスティバル内 SGH 校発表会

11月17日、聖心女子大学で開催された上記イベントにおいて、高2生4名が本校の社会貢献教育とその成果について発表した。特に子ども食堂における活動と小学生や幼稚園児を対象とした教育活動が高く評価された。

- ・第二外国語講座78名 (通年) (中国語・仏語・独語・西語)
- ・さくらサイエンスプラン(科学振興機構)によりベトナムの高校生が来校、交流 (7月)
- ・ユニクロ古着回収協力 (全校)
- ・飛龍祭 (文化祭) における募金活動 (世界寺子屋運動 及び LGBT 支援)
- ・シンガポール Raffles Institution 生徒の受け入れ (9月)
- ・オーストラリア St.Francis Xavier College の生徒の受け入れ (9月)
- ・オーストラリア Loreto College の生徒の受け入れ (1月)

(4) 2018年度 活動主な表彰一覧

- ・模擬国連世界大会 優秀賞 (高2生 2名)
- ・模擬G20サミット2019 in 北京 最優秀チーム賞 (高1生1名、高2生2名)
同 最優秀元首賞 (高2生1名)
- ・第7回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 優勝 (高3生 3名)
同 ベストディベーター賞 (高3生1名)
- ・第8回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 第3位
(高1生1名、高2生2名)
同 ベストディベーター賞 (高1生1名)
- ・東京都高英研主催 第22回 高校生英語ディベート大会 優勝 (高1生 4名)
- ・第4回 PDA 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 優勝
(高1生1名、高2生2名)
- ・第4回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会 準優勝 (高1生1名、高2生2名)
- ・PDWC2019 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 準優勝
(高1生1名、高2生2名)
- ・JWSDC 第2回全国高校生英語ディベート大会2018 準優勝(日本チーム内第1位)
(高1生1名、高2生2名)
- ・第7回日本高校生パラメンタリーディベート新緑杯 準優勝 (高2生3名)
- ・NSDA ディベート日本第4回全国大会 準優勝 (高3生2名)
- ・英語ディベート東京工業大学杯2019 準優勝 (高2生1名 招待参加)
- ・国際言語学オリンピック世界大会 日本代表 (高3生1名)
- ・平成29年度第2回国際連合公用語英語検定試験 特A級外務大臣賞 (高2生1名)
- ・第57回全国高等学校生徒英作文コンテスト 入選 (高1生1名)
- ・図書館を使った調べる学習コンクール 毎日新聞社賞(日本語部門優秀賞)(高2生1名)、
図書館振興財団賞(英語部門優秀賞)(高2生1名)、佳作 (高2生1名)
- ・関西学院大学、読売新聞社、ジャパン・ニューズ主催第10回高校生英語エッセーコンテスト 優秀賞 (高2生1名)
- ・東京家政大学主催 生活をテーマにする研究・作品コンクール 優秀賞 (高2生1名)
- ・旺文社主催 第62回全国サイエンスコンクール 人文社会科学教育部門 旺文社赤尾好夫記念賞 (高2生1名)
- ・全国高等学校書評合戦ビブリオバトル in 東京 優秀賞 (高1生1名)

- ・ 國學院大學主催 第 14 回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 地域文化研究部門 佳作
(高 2 生 1 名)
- ・ 高校生の君たちへ 漱石作品読書感想文募集 優秀賞 (高 3 生 1 名)
奨励賞 (高 3 生 1 名) 入賞 (高 3 生 9 名)

(5) 2018 年度 英語力の分析結果

2018 年度も帰国生を除く高校 1 年生、2 年生が GTEC for students を受検した。
(Reading320 点、Listening320 点、Writing170 点の 810 点満点の筆記テスト及びタブレット端末を使用した Speaking テスト 170 点満点)

【高校 1 年生】

Reading 207 点 (64.6%)	Listening 235.3 点 (73.5%)
Writing 121.1 点 (71.2%)	Speaking 135 点 (79.3%)

【高校 2 年生】

Reading 241.3 点 (75.4%)	Listening 255.2 点 (79.75%)
Writing 122.1 点 (71.8%)	Speaking 138.6 点 (81.5%)

S G H アンケートでも「字幕に頼らずにテレビ番組や映画を理解できる」と答えた生徒の割合が 48% から 67% へ上昇した。Speaking 力や Listening 力が向上し、英語に慣れた生徒が増え、4 技能がバランスよく伸びている実感を生徒が持ったことを示している。

8 5 年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

複数教科・科目から学ぶアプローチと問題発見・解決型の活動を重視し、それにより知識の充実、発信意欲・技術の向上、交渉・連携しつつ行動する力の強化を図るという狙いについては、十分に達成できたものとする。

学校設定科目を設けず、従来の教科のもと連携をはかるという今回の研究開発は、英語科を扇の要とし、より専門的な内容理解と言語を活用した発信力の育成を 2 本柱として、教科特性を活かした教科連携を進めることとなった。また、平行して行っている自調自考論文(卒業論文)作成のさいにも、学外活動を活かす生徒や専門分野にこだわる生徒が増え、副次的な効果も上がった。

テーマが「人間の安全保障」という難しい設定であったが、時事教材やニュース、外部講師の支援をうけ、高校生としての理解しやすい工夫を毎年行うことができた。

また、毎年のアンケートから、生徒の興味関心をとらえ、その成果を次の学年に伝えて、調整をはかるなど、縦横の連携が進んだ。また、高校生の活躍は、併設の中学生にも興味関心が広がり、中学 3 年の公民の授業でも取り入れるなど、学校全体で、研究開発に取り組むことができた。

「探究型学習を、いかにして「行動できるリーダーの育成」につなげるか」という課題については、学ぶことの社会的な意義を実感し、行動主体としての自覚を持つと同時に、研究や新しい技術に触れ、より学びたいという意欲につながっていることが読み取れた。また、世界高校生会議を実現したことで、実践の場を提供できたことで十分な成果が上がったと考えられる。

(2) 高大接続の状況について

東京外国語大学との連携は、①生徒への直接支援、②教員への支援、③高校生水会議への支援の柱で行われた。①の生徒への直接支援は、英語の授業支援が中心となった。

留学している大学院生がメンターとして継続的に授業に参加し、アドバイスを送ることで、英語を使う機会が増えるとともに、自分の意見を表現する発信力の強化につながった。

②の教員支援では研修の講師として、授業の組み立てや資料提示の助言をいただいた。また、③の高校生水会議では、論文・発表・プレゼンテーションのすべての部門において、審査の中心的な役割を担っていただいた。

また、大学訪問も実施し、大学への理解を深める取り組みも行ったが、単位認定制度の導入には至らなかった。

(5年間の連携大学への合格者16名 入学者8名)

(3) 生徒の変化について

S GHアンケートの学年(期)の比較からは、5年間の変化が読み取れる。200語以上でエッセイが書けると答えた生徒の割合は、高校1年ではあまり変わらないが、高校3年で上昇している。このことから、高校の授業で、力がついていることが読み取れる。

(図3)

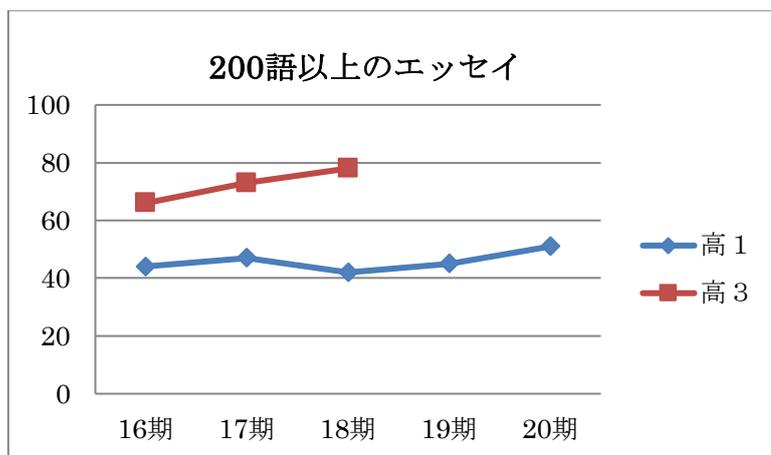


図3

グローバルリーダーと地球社会に貢献したいと答える生徒の割合も同様であり、授業での取り組みにより、高校時代に伸びた資質であるといえる。(図4)

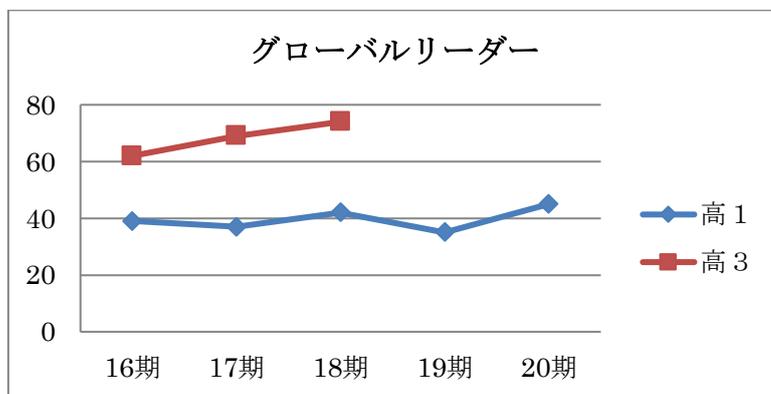


図4

一方、政治経済の社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしていると答えた生徒の割合は、高校1年では、5年間で減少し、高校3年で上昇している。これはSGHを進める過程で、このトピックを高校1年よりも高校2年で取り上げることとしたカリキュラムの変更が影響している。このことから、生徒の理解とカリキュラムの相関が高いことがわかる。(図5)

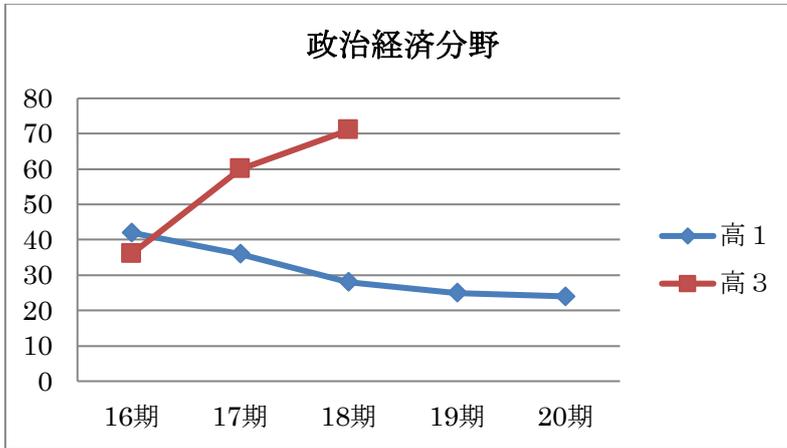


図5

海外大学・大学院への希望は、微増している。進学者の数値に変化がないことから、大学の国際化の影響もあり、進学後の留学を考える生徒が増加したと思われる。(図6)

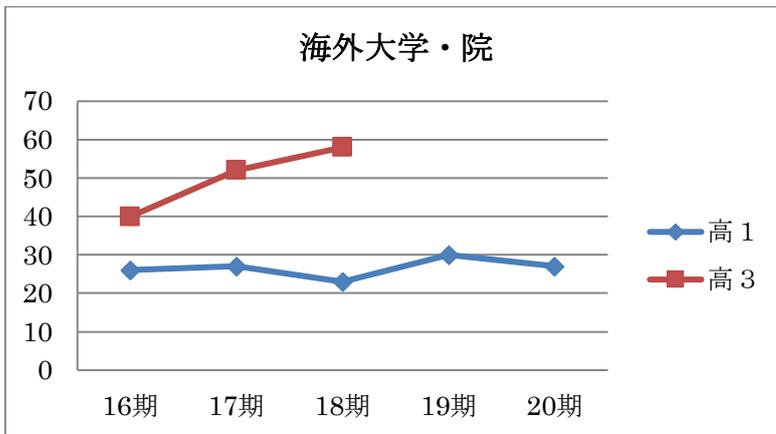


図6

その一方、「自分が得意とする分野を極めたい」と答える生徒は、もともと90%を超えており、SGHによって、大きな変化は見られない。ただし、「英語で発信したい」、「日本がグローバル社会の中で、存在価値のある国になるよう自分ができることをしたい」と答えた生徒の割合が大きく上昇した。Service Learningを始めとする、社会貢献活動や国際会議を経験したことで、行動とするリーダーとしての認識が高まったことが読み取れる。

世界高校生水会議 (Water is Life 2018) のアンケート結果からは、次の点が読み取れる。

・会議参加生徒の満足度は総じて高く、すべての項目で最高評価をしている。コメントでは、次の3点についての評価が高かった。

① 専門家から学ぶ

3回の専門家による講演、企業のワークショップ、大学教授からの発表へのコメントは、相手を高校生扱いせず、時に厳しい指摘も多くあった。しかしながら、研究をし

て臨んだ会議で、自分たちの至らなさを感じることは、次への意欲につながったと感じている。このことの意義は大きい。

② 生徒同士で学び合う

各チームは、ポスタープレゼンテーションや分科会で自国の状況を発信して共有すると同時に、本やインターネットでは知りえないような他国の状況を知ったり、自分と同じ高校生による取り組みに刺激を受けたりする貴重な機会となった。

③ 国際交流を楽しむ

18ヶ国から集まった137名の高校生と、東京謎解きオリエンテーリングや分科会で親睦を深めることができた。また最終日の **International Afternoon** では、個人で、あるいはチームで、それぞれがお国自慢のパフォーマンスを披露したことに会場は大いに盛り上がった。

- ・キャスト（大会運営ボランティア）・ホスト（ホームステイ受け入れ）生徒の満足度は、おおむね高かった。一方その関わりの方深さによって、評価にばらつきがでた。もっと主体的に動かしたかった、時間が足りなかったという声があり、生徒たちがこの会議を楽しみにしていた様子がうかがえる。満足に感じた点は、次の3点である。

① 国際会議を自分の学校が開催したことへの自己肯定感

世界18か国の高校生と直接会話したことで、この会議に意義を実感した生徒が多かった。体験することの重要性を指摘する声が多かった。また、外国の生徒の頑張りをみて、自分も頑張ろうと思ったという声もあった。

② 自分の得意分野で会議に貢献できた達成感

英語に自信のない生徒でも自分の関心事や特技が活かせるような職種を多数用意したことで、無理なく楽しく参加できたと感じる生徒が多かった。

③ 英語のスキルアップへの意欲

英語の得意な生徒は、分科会でのファシリテーターや式典でのMC、また施設見学先での英語でのガイドなど、事前に勉強会や実践トレーニングが生きる経験を積んだことで、自分の英語力に自信が持てたとする生徒がいた。また、外国人の友達ができ、もっと英語を話せるようになりたいと思う生徒もおり、英語のモチベーションがあがったと答えた生徒も多かった。

- ・海外参加者からの評価は、満足度95%と大変に高いものであった。

スムーズな運営やバラエティの富んだプログラム、ボランティア生徒の関わりなど、本校が、SGH校として狙いをもって取り組んだ内容に評価が高かったことは喜ばしい。残念だった点としては、ホームステイにしたことで、慣れない公共交通機関移動の疲れや暑さが挙げられた。日本の学校文化が世界と異なる点でもあるので、興味深い指摘であった。

(4) 教師の変化について

専任教員数 78名のうち、5年間でSGH委員会に所属した教員は、47名、該当する学年の関わった教員が述べ51名であり、WILも含めると、ほぼ全教職員がなんらかの形で、この構想に関わった。関心をもって取り組んだという割合は85%近くになった。

また、毎年SGHアンケートの結果を次年度の授業に反映させていることから、ほとんどすべての項目で、生徒ができると答える割合が上層しており、教科や学年として、

このプロジェクトを活用していることが読み取れる。

SGHに関しては、

- ・他教科の学びに関心を持つようになった
 - ・生徒の多様な面がはっきり視覚化できるようになった
- と連携強化を挙げるコメントがある一方、
- ・生徒や教員の多忙化
 - ・学業（受験）との両立の困難
 - ・プロジェクトの種類が多い

といった、限られた時間の中での消化不良を心配するものもあった。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

保護者会等を利用し、SGHの取り組みを紹介したり、飛龍祭（文化祭）や学校説明会で、発表する機会を設けたことで、保護者から不安視する声が少なく、取り組みへ高い関心を持っていただけた。毎年発行される保護者組織(教育後援会)の会報でも、SGH、留学といったトピックで特集を組むなど、学校への理解が深まった。

また、同窓会組織（アトラス）のネットワーク化の機運が高まり、卒業生が母校へ関心を寄せてくれるようになったことも変化の表れである。

(6) 課題や問題点について

課題については、大きく2つあげられる。①教員の課題、②生徒対応である。

教員の課題としては、特定の教員への負担増が挙げられる。中核となる教員に仕事が集中しないよう、人的な配慮や時間数配慮による負荷は、継続の上で今後の課題である。また、大学や企業のやりとりなど、新しく増えた連携強化の負担増は、ITツールなど、新しい技術を利用する発想や機器準備なども必要になる。こういった新しい対応が課題である。

また、生徒の中には、興味を持ってない生徒、カリキュラムに熱心にとりくみ疲労を訴える生徒など、対応が必要な生徒もいた。担任やカウンセラーなどと協力し、生徒への負荷を調整することも課題となった。

(7) 今後の持続可能性について

SGHのプロジェクトは、上記の結果からも生徒の自主性、自立性を育て、将来に対するビジョンに育んだ。今後は、高1の広島プロジェクトによる平和学習と国際交流、高2のService Learningによる社会貢献活動を軸として、継続していくことを予定している。

また、SGHに取り組む中で、①長期的に一つの問いを探究する姿勢を育てる困難、②チームで学ぶことの意義を実感できないこと、③高校生が主体的に運営する機会の不足を感じた。引き続き、生徒が活躍できる場の提供も行っていく予定である。

【担当者】

担当課	渋谷教育学園渋谷高等学校	TEL	03-3400-6363
氏名	高際 伊都子	FAX	03-3486-1033
職名	副校長	e-mail	takagiwa@shibushibu.jp